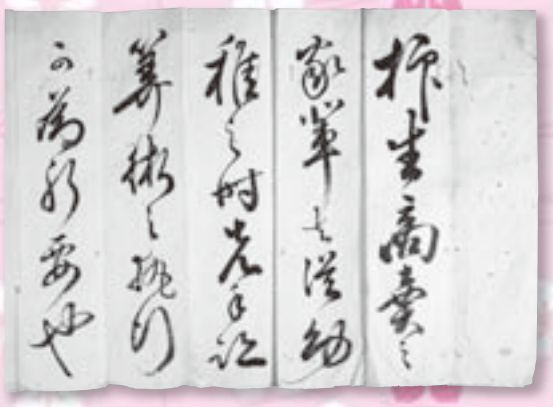
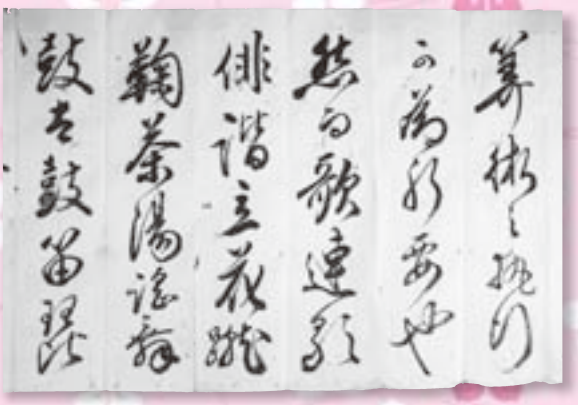
つちうら発

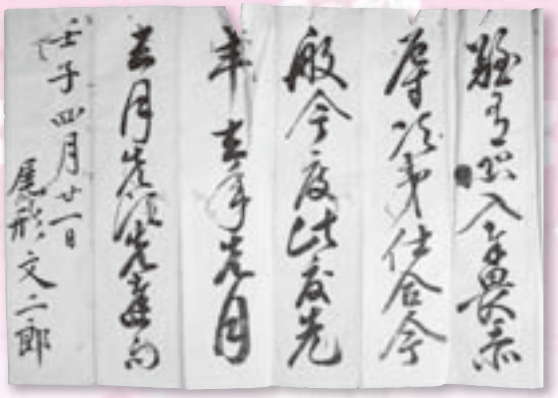
未来への伝承

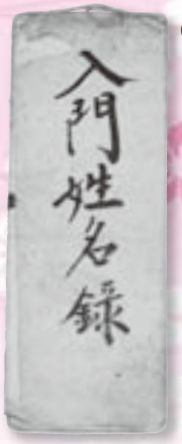
⑭

沼尻墨僊筆「手習本（商売往来）」


①


②


③



④

「抑商売の家に生まれし輩は、幼稚のときよりまず手跡・算術の執行肝要たるべきなり（商家に生まれたら書道・算術の修業が大切です）」【写真①】と始まる古文書は、江戸時代の寺子屋で用いられた読み書きの手本です。

現在、学校では教科書を使って授業を進めるのが一般的ですが、江戸時代は師匠が書いてくれた手本が教科書の役割を果たしました。

この手本は、和歌、連歌、俳諧（俳句）、立花（生け花）、蹴鞠などの遊芸は家業の余力があったならば嗜んでもいいと続きます【写真②】。反対に金銭の費えにしかならないのでしてはいけないものとして、碁、将棋、双六、小唄、三味線をあげ、長い酒宴や分不相応の衣装や装飾品、華美な居宅も無益で衰えの基になるとしています。

この手本を使って勉強していたのは、尾形文二郎という11歳の男の子でした【写真③】。文二郎は嘉永3（1850）年10月15日、9歳で塾「天章堂」に入門しています。「天章堂」は沼尻墨僊（1775～1856年）が琴平神社（中央一丁目）の境内に開いた塾で、この年、墨僊は76歳でした。

文二郎は当時、穀物や古着などを扱って、手広く商売をしていた大国屋徳兵衛家の、三代目徳兵衛の子として生まれました。大店の後継者になるかもしれない文二郎に対して墨僊は、「読み書きそろばん」の大切さと、遊芸にふけることの危うさを書いて教えたのです。

墨僊の塾に限らず江戸時代の寺子屋では学習の進捗状況に応じた手本を師匠が書き与えました。文二郎も「商家心得」を学ぶ2か月前には、「燭台、行灯、提灯、短檠、薬鑵、茶碗、茶柄杓、盥…」など物の名前を書き上げた手本を学びました。難読ですが、いずれも当時の日常生活に欠かせない道具の名前です。

手本は進み具合だけでなく、性別、出身、その子が将来就くであろう仕事も考慮して書き与えられました。「天章堂」には商家の子も、職人の子も、そして近隣の村から農民の子もやってきました。「夜学」や「素読（漢文の読み方）」だけの塾生（生徒）もいて、墨僊の塾は城下町の多様なニーズに応えていたようです。墨僊は20代から82歳で亡くなるまで塾を営み、「入門姓名録」【写真④】には500人を超える塾生の名があります。

墨僊は没後「静寿庵黙翁居士」とおくり名されました。市立博物館では、多くの筆子（生徒）を静かに見守り続けた教育者の足跡を、第30回特別展「沼尻墨僊　城下町の教育者」でご紹介します。詳しくは、今号8ページをご覧ください。

問 市立博物館（☎824・2928）

発行　土浦市　〒300-8686　土浦市下高津一丁目20番35号　☎029-826-1111
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/　E-mail:info@city.tsuchiura.lg.jp
編集　市長公室広報広聴課　再生用紙を使用しています　環境に優しい大豆インキを使用しています
次回「広報つちうら」3月中旬号は、3月17日（火）発行予定です

人口と世帯数（平成21年2月1日現在）　14万3930人（男7万1612人　女7万2318人）5万5787世帯